「研究論文」

ユニバーサルデザインの視点に基づいた小学校音楽科の学習について　－特別支援学級在籍児童への支援を通して－

諸岡李穂（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）
加納暁子（長崎大学大学院教育学研究科）

１研究の背景と目的

現在、特別支援学級に在籍をしている児童は、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課によると、令和２年度で約 30 万人とされている。また、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育が近年取り上げられている。文部科学省の報告には、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築として、「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある『多様な学びの場』を用意しておくことが必要である。」[1] インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進として、「基本的な方向性としては、障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。その場合には、それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けているかどうか、これが最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要である。」[2] としている。

ユニバーサルデザインは、あらかじめ、障害の有無、年齢、性別、人種等に関わらず、多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインする考え方である。障害者の権利に関する条約第２条（定義）において、「ユニバーサルデザイン」とは、調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲ですべてのひとが使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう。ユニバーサルデザインは、「特定の障害者の集団のための支援装置が必要な場合には、これを排除するものではない」と定義されている。このことから、特別支援学級が増加している現状と、共同学習、ユニバーサルデザインの視点など様々な背景が学校教育において必要であると考える。音楽は幼少期から触れ合う機会が多く、音楽科は多くの児童にとって親しみのあるものであると考える。そのため、特別支援学級在籍児童が交流学級で行う音楽の学習の共同学習は比較的行いやすい傾向にあると考える。一方で、共同学習は、障害の有無に関わらず、授業

内容が分かり、学習活動に参加している実感・達成感を持つことが必要とされている。実際の教育場面において、学習の進められ方は通常学級のカリキュラムをベースとしており、特別な支援を必要としている児童が授業内容を理解しているかどうかについては、不明瞭である。そこで、本研究では特別支援学級在籍児童への支援の観点からユニバーサルデザインの視点に基づいた小学校音楽科の学習について考察する。

２先行研究

阪井（2017）は、小学校の学習における音楽科の指導側から見た「生じやすいつまずき」について、以下のように項目を挙げている[3)]。

歌うことに関して	調子はずれである
	周囲と音量を合わせられない
	歌う意欲が見られず、歌わない
楽器を使うことに関して	鍵盤ハーモニカの習得が遅い
	リコーダーの習得が遅い
聴くことに関して	音や音楽を集中して聴くことが苦手である
リズムを合わせたり打ったりすることに関して	簡単なリズムが打てない
	リズムに合わせて動くことが苦手である
	手遊びなどで友達と触れ合うことが苦手である
読譜に関して	視唱、視奏が顕著に苦手である
その他：　不必要な離席をする、友達と協力した活動ができない	

樫本、橋本（2010）は、コミュニケーション面に関しては、音楽科の授業で上手くできない行動は、表現・模倣・合わせる要素を含むものであることであり、理由として、音楽は一人での作業ではなく、周りの友達と共に行う作業であることが大きいと述べられている[4)]。特別支援学級や特別支援学校では、コミュニケーションの力が劣るため表現を引き出すために音楽的課題が多く用いられている。1 年生の音楽科の学習には、リズム遊びや手遊びなどが含まれており、周りの友達とともに行う活動へのつなぎとなっているとされており、音楽科の学習における周囲とのコミュニケーション面での課題は、支援を行うことが必要であると考えられる。鍵盤ハーモニカやリコーダーなど指先の巧緻性を求められる課題も重視されており、多くの楽器が目に入ることの刺激の多さ、音に過敏であるため色々な音が発生することへの拒否感などからも音楽科を苦手とする要配慮児は多いとされている。

先行研究より、協同性である友達と協力した活動ができないことは、生じやすいつまずきとして明らかになった。そこで、友達と協力をする活動を遊びの感覚で取り入れることで、つまずきが軽くなるのではないかと考える。言葉による伝

え合いとしては、習得が遅いことやコミュニケーションの力が劣ることによる表現を引き出すための音楽的課題として協同性とともに上手くできていないことが示されている。そこで、言葉の模倣をする、日常的に使う言葉を取り入れた活動を展開するといった活動を行うことで言葉を意識することができる支援につながるのではないかと考える。鍵盤ハーモニカやリコーダーの指の動かし方、視唱・視奏における課題も明らかになっていることから、音楽の授業に参加をすることができる支援について考察をすることとする。

３小学生の音楽に関する嗜好調査と教職員に対するアンケート

2021 年７月、長崎県内のＡ小学校において、１～６年生を対象として、音楽の中で一番好きな活動と苦手な活動について、また３～６年生を対象に読譜に関する意識調査のアンケートを行った。

歌唱に関して、1 年生では約４割の児童が好きな活動として挙げているのに対し、２，３年生では約３割、４，５，６年生では約２割と減少している。歌唱に対する苦手意識として、低学年は声の大きさやきれいに上手に歌うことができないことが挙げられている。中学年からは声が出ない、恥ずかしいという理由が挙げられ、高学年になると、音程を取ることができない、高音が出ない、声変わり、恥ずかしいといった理由が挙げられるようになる。低学年が苦手な理由として挙げる中に「きれい」や「上手に」は、初めて聴く楽曲がＣＤであり、洗練されたものであることが要因であると考える。幼児期のように楽しく歌を歌うために、きれいな歌、上手に歌うことにこだわりすぎてしまわないようにするためには、初めて楽曲に出会うとき、教師が実際に歌うことが楽曲を身近に感じ、楽しさも感じることができると考える。中学年、高学年では、思春期や変声期といった課題が生じ始めることが要因であると考える。歌うことの恥ずかしさには音程を取ることの難しさがあると考え、音取りの時間を多く確保することや、音源となるピアノの近くで歌うことができるようにすること、またタブレットを使い、分からない音に対してすぐに確認ができるようにすることなどの手立てを行うことで改善することができるのではないかと考える。高音に関しては、教科書に掲載されている楽曲のうち、自身の声が出る範囲で取り組むように伝えることや、全員が高音のパートを歌うのではなく、自分の声域に応じたパートを担当することなど授業中の工夫をすることで改善することができるのではないかと考える。特別支援の見方からも、音源による支援やパートによる支援をすることで、自信を持って授業に取り組むことができると考える。

器楽に関して、1 年生が３割に対し、２年生以上は５割前後が好きな活動として挙げている。アンケートは７月に行ったものであり、1 年生はまだ鍵盤ハーモニカの学習を十分に行っていなかったことも要因として考えられるが、鍵盤ハーモニカやリコーダーの学習時間が増えたことが、好きな活動に器楽を挙げる児童が増えた要因ではないかと考える。一方で、２年生までは約１割であった器楽の

苦手意識は３年生になると約４割に増加している。これは、リコーダーの学習が始まることが背景としてあると判断する。リコーダーが難しいと感じる理由について息の入れ方や運指の課題として覚えること、穴を上手く塞ぐことができないこと、指が届かないこと、リズムやテンポをうまく取れないことが挙げられている。この課題は鍵盤ハーモニカでも挙げられており、息継ぎや指を上手く動かすことができないこと、さらに、離れた位置の鍵盤を使うこと、黒鍵を使う機会が出てくることなど高学年で新たに学習する内容が出てくることも器楽が苦手であるという意識につながると考える。また、楽譜を読むことができないことも器楽が苦手と感じる要因であることが明らかとなった。実際に読譜力の意識調査を行うと、４年生と６年生はト音記号、ヘ音記号のどちらも読むことが苦手な児童が多くいることが明らかであった。ト音記号の楽譜を読むことは得意な児童は、４年生から６年生までの間に少しずつ増えていることから、繰り返し楽譜を読むことを行うことで、活動の中で楽譜を読むことによる苦手意識が軽減されていくのではないかと考える。特別支援の見方からも、繰り返し活動を行うこと、スモールステップで取り組むことは必要であり、技能面に関しては、身に付くまでに時間がかかるため、丁寧に進めていくことが必要であると考える。

鑑賞に関して、好きな活動として挙げている児童は約２割から３割、苦手な活動として挙げている児童もどの学年も２割以下であることが分かった。日常的に聴く音楽ではなく、音楽の学習の中での「聴く」という活動であることから、好きな活動として挙げている割合が高くなっていないと考える。苦手な活動の理由として、音を聴くだけでは面白くない、聴いていると歌いたくなってしまうといった意見が挙げられている。音楽を聴くことによって自分も演奏したくなるという気持ちが高まることから、苦手な活動としている児童もいると考える。実際に演奏したくなるという気持ちの表れに対して、「どのように演奏することができるのか」という思考力にはつながっていないと考える。苦手な理由として、多く挙げられたこととして、思ったことを書くことができない、発表することができない、言葉で表現することができない、気付きを書くことができないといったものが挙げられている。歌いたくなるが、どのように歌いたいかと問われると分からないので、苦手な活動になってしまうのではないかと判断する。幼児期では、音楽は聴いて楽しいと感じることが中心であるのに対し、小学校になるとどのような音楽か、どのような楽器が使われているのか、知識や表現することが必要となる。言葉で表現をする事に関しては、どのような表現が活用できるのか例えを事前に提示しておくことで、自由記述でも書くことができる内容のヒントとなり、苦手と感じることが少なくなると考える。自分の思いを書くことが難しいことは、特別支援の見方からも必要であり、自由に書くことと同時に具体的な例を出すことで、取り組みやすさが生まれると考える。

2021 年７月にＡ小学校にて実施した教職員に対する配慮を必要とする児童への支援についてのアンケート結果から、学級で支援を必要としている児童のうち、

ＡＤＨＤと判断しているものが多い。注意転動や注意集中の困難などがあることから、音楽の学習では支援を必要とすると考える。歌唱や器楽の際には、歌声、自分が出す音以外にも伴奏の音や他の楽器の音などがあり、集中することが必要となる。集中力をなるべく保ちながら授業を行うためには、活動の区切りを付けながら行うことができると考える。「練習をする時間」として個人練習を行うだけではなく、「○小節までの練習の時間」とし、時間を短く区切りながらスモールステップで行うことで、集中力を保つことができるだけではなく、できるようになったという達成感も持つ事につながると考える。同じ楽曲の楽譜であっても難易度を変化させたものを用意することで、自分が達成することのできる目標に向かって集中して取り組むことにつながると考える。また、音楽の授業は移動教室の場合が多い。そのため、注意散漫になりやすく、教室に忘れ物をしたり、物を置くスペースが少なく整理整頓ができなかったりといった問題が生じる。音楽のときに必要なものを固定化させたり、音楽室内で物の置き方について統一をすることで、クラス全員が移動教室でも学びやすい環境を作ることができると考える。ユニバーサルデザインとして行われていると回答が多かった座席の工夫や机間指導は音楽の学習においても有効な方法であると考える。掲示をする楽譜が見えやすい位置、見本となる教師の演奏が見やすい位置を座席として設定したり、全体で演奏法について確認をした後で、個別支援を行ったりすることで、誰もが参加できる音楽の授業につながっていくと考える。専科の場合は、学級担任とも協力をしながらどのような支援をする事が配慮を必要とする児童にとって学びやすい環境であるのか、情報を共有しておくことが必要であると考える。

４歌唱教材「やまびこごっこ」における実践

実践授業をするにあたって、事前調査アンケートを行った。結果から、児童は音楽の学習に対して、自分で歌い方や演奏の仕方を考えることが好きであり、また、友達と協力して学習に取り組むことも好きであることが分かった。そこで、実践授業では、歌い方について考えることができる内容と、友達と協力をして活動する内容を含めたものを行い、特別支援学級在籍児童も音楽の学習に楽しく取り組むことができる支援方法を実践する。題材は、1 年生音楽「やまびこごっこ」を行う。1 時間目は“やまびこ”という自然の出来事について知り、実際に友達同士で２人組のペアになり、隣の友達が言った言葉の真似をする活動として「山びこ遊び」を行うことを目的とした。2 時間目は前時の「山びこ遊び」を通して音楽学習である強弱について理解や経験をする事を目的とした。

教材について、ユニバーサルデザインの視点で考えたとき、歌詞カードでは、フレーズ毎に分けて提示をしたことにより、見やすさと集中力を高めることができたと考える。「山びこ」の学習内容であったことから、フレーズ毎に問いかけをする事ができ、児童の理解としても高めることができたのではないかと考える。特に集中力を持続させておくことが課題である場合には、フレーズ毎にわけるこ

とによって切り替えることができる小さな瞬間になると考える。また、画用紙に書くことによって、文字を大きく示すことができるため、後方の座席であっても見やすいという利点があると考える。

呼びかける人間役と答える山びこ役の歌詞カードと役割カードとの色を同じにすることで、どちらの役をすればよいのか２つを連動させて活動を行うことができたのではないかと考える。一方で、知的学級在籍児童については、活動を行う中で「山びこ」に対する理解が不十分であることが明らかとなった。歌詞カードと人間役カードと山びこ役カードを連動させ、人間役カードと山びこ役カードの方には顔のマークや山のマークを書いていたが、自分の行いたい方を優先してしまう傾向が見られた。教材における支援の他に、机間指導として活動を行う際に、持っているカードと役割について一緒に活動を行い内容に適した活動ができるような支援をする事が必要であると考える。

教科書の拡大楽譜は、拡大をすることができる限界があるため、拡大しても後方からは見えにくいという事実が明らかとなった。特に低学年の時には楽譜を見ることよりも、実際に聴いた音を頼りに歌唱をする傾向が見られる為、楽譜よりも歌詞カードに歌詞を書くことの方が有効であると考える。今回の実践では１時間目は拡大楽譜を使用したため、２番の歌詞を歌詞カードとして作成していなかった。拡大楽譜を黒板に貼った際、多くの児童から「見えない」と言う言葉が聞こえた。また、２番までを歌唱する際、歌詞そのものを全て１番で歌ってしまう児童が多く見られたことから、低学年にとっては、歌詞カードを作成することが有効であると考える。2 時間目に、全ての歌詞をカードに記入し提示をすると、児童が歌詞を正しく歌うことができていた。

強弱を意識する教材として、decresc.を三角形の画用紙で提示をした。声の大きさとして、イメージを持つ事ができるように提示をしようとしたが、情報が少ない教材であったため、活用することが難しかった。このことから、声の大きさをイメージする教材として、小さい方にはリス、大きい方にはゾウといった児童がイメージをしやすい具体物を提示したり、提示した具体物に合わせて、どのような声がよいか考える時間を作ったりすることが必要であると考えられる。

振り返りシートには、自由記述の感想と、山びこ遊びができたかどうか、楽曲を歌うことができたかの 3 つの項目を用意した。山びこ遊びができたか、楽曲を歌うことができたかの 2 つの項目は、はい☺　・いいえ😞とし、顔のマークを付けることで、アンケート調査同様、特別支援学級の児童と通常学級の児童が同じタイミングで、同じ内容の振り返りを自分でできるようにした。振り返りシートの書き方の例として黒板に提示をしておくことができると、取り組みやすくなると考える。また、黒板提示をすることは、他の児童にとっても何を書けばよいのか、何を行えば良いのか再確認をすることができるきっかけになるのではないかと考える。

積極的な授業参加を促すためには、活動内容に楽しいと感じられるものを入れ

ること、できたという達成感を持つことができる場面を用意しておくこと、発表という児童が好きな場面を作ることが考えられる。学習としての音楽だけではなく､幼児期からのつながりを持った遊びとしての音楽の要素を取り入れることで、楽しいという気持ちを持ちながら参加をすることができると考える。達成感を持つこととして、教科書に記載されているものだけではなく、自分の好きな言葉を使って山びこ遊びをするといった自分で考えたことを実際に授業内で行うことができる活動を取り入れることで、友達と協力をしながら授業に参加をしたと判断する。また児童の積極性に合わせ、全体の前で発表するという好きな場面を取り入れることでその後の活動にも集中力を持って取り組むことができていたと判断する。また、教材の工夫をする事で積極的な授業参加を促すことができると考える。ユニバーサルデザインの視点で作成した教材は、児童の視線を向けることができていたことが多く、参加をしやすい状況にあったと判断する。

授業への参加として、山びこ遊びをするような“呼びかけるような動きを取り入れる”､「えっへへへへへ」「とっととんとんとんとん」のような“リズムが複雑な部分は身体を動かしてみる”といった動作を入れることは、クラスとして積極的に参加をしているように判断した。立った状態で歌うだけではなく、歌詞に合わせて動いてみること、座ったまま鑑賞をするのではなく、聴こえてくる楽器の真似をしてみること、リトミックを取り入れリズム学習を体感として経験することが有効であると考える。一方で２つの動作を同時に取り入れることに難しさが生じることも分かり、教材や学習目標を考慮しながら行うことも必要であると考える。

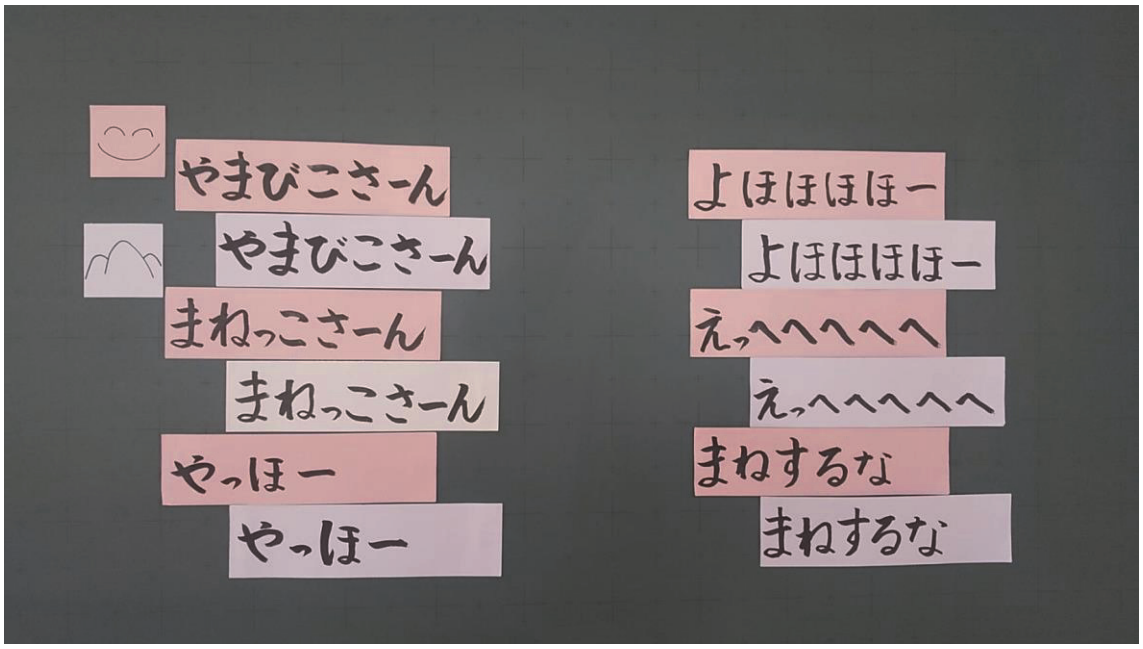

写真１　役割カードと歌詞カード[5)]

５考察－共同学習に必要なこと－

特別支援学級在籍児童が交流学級で音楽の授業に参加をするために必要となる言葉かけや教材は、通常学級の児童にも役に立つものであると考える。歌唱では、歌詞カードが黒板に提示をされていることで、教科書に集中してしまうのではなく、前を向いて歌うことにつながり、教材を視覚化することによって今どのような活動を行っているのか、確認をしながら活動を行うことができる。器楽では、わざ言語を使って説明をすることで、楽器演奏を苦手とする児童にも伝わりやすくなったり、他の楽曲に変わった場合でも思い出しやすくなると考える。鑑賞の際に、注目する観点や音楽を聴くときに使える言葉をあらかじめ提示をしておくことで、ただ聴くだけではなく、考えながら聴く、聴いている時に感じたことを文章などで残しておくことがしやすくなることにつながると考える。音楽を苦手とする児童にとって、スモールステップで練習をする機会が多くあることは、できるようになるといった達成感と、自信につながり、音楽に対する苦手意識の軽減になると考える。

本研究より、特別支援学級在籍児童が積極的なコミュニケーションを取ることは難しい場合が多かったが、関わる活動を取り入れることできっかけ作りになる。活動内容として、遊びの要素を取り入れることで特に低学年は楽しさを感じながら自然な形でコミュニケーションを取ることができると感じた。言葉による伝え合いにおいては、音楽活動の中で日常的に馴染みのある言葉を取り入れることで伝え合うことは難しい場合でも、伝えることに対する意識のきっかけとなると感じた。今回の実践で行った「やまびこ」のように発した言葉を相手が真似をしてくれることは伝え合いに関係していると考える。音楽的要素として、リズム模倣、身体模倣を行う活動を取り入れ、そこにリズム唱や、日常的に使うことができる言葉を当てはめることで伝え合いになる。技能に関する課題として挙げられているものは、全ての児童に関係する課題ともつながっていることが分かった。そのため、伴奏を教師が工夫することや、わざ言語を使うこと、練習する時間を多く確保することと同時に、スモールステップで活動を行うことで楽しく参加でき、取り組みやすいものになると考える。

今後の課題として、様々な実態に応じて、どのような支援が必要となるのか考えると同時に、必要な支援と交流学級で行う際にユニバーサルデザインの視点を持って授業展開の作成や支援に取り組むことが必要であると考える。また、一人ひとりの実態に合ったものを用意ができるように教材や教具の研究を行うことが必要であることを視野に入れていきたいと考える。学年が上がるにつれて、歌唱や器楽では音域が広がり、リズムも複雑なものになっていく為、できたという達成感をもつことができるようにするための児童の行動の価値づけをどのように行うのか、習得に時間のかかる技能面では全員で同じ楽曲を扱うために使用する教材を提示するタイミングや方法を検討することが必要であると考える。鑑賞では、「感じたこと」を言葉にする難しさと、それを他者に伝える難しさに対して、例

示をすること以外の方法を検討することが、児童にとってより楽しいと感じることのできる音楽の授業になると考える。また、今回は低学年での実践であったため、中学年、高学年では配慮することが変化する。全体指導の中でのリコーダーの扱い方や技能習得、声部を分けて歌うことが必要となる楽曲での支援方法、一度に複数の情報を聴きとることが必要になる楽曲の理解をするための支援などを検討することが必要であると考える。ダウン症児、難聴児、肢体不自由児など今回の実践授業では関わりがなかった障害に対しての支援方法についても検討をしていきたいと考える。

注

1)共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）初等中等教育分科会　平成 24 年 7 月　概要

2)同上

3)阪井恵「音楽授業のユニバーサルデザインに向けて－音楽科の教師・研究者のための基本的な情報－」『明星大学大学院教育学研究科　年報』第 2 号、2017 年、p.37

4)樫本真理、橋本創一「通常学級（音楽科）における授業参加スキルに関するアセスメント法の検討－特別な教育支援を必要とする小学校 1 年生を対象として－」『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』2010 年、p.160

5)役割カードの人間役カードはピンク、山びこ役カードは白で色分けしている。また、歌詞カードも役割カードと対応させて、先行して歌う歌詞カードはピンク、後続の歌詞カードは白に色分けしている。